

二〇〇六年度 東北大学前期試験 国語解答 解説及び採点基準

ここでは国語を100点満点で考えています。学部学科によって満点が異なることも考えられますが、配点のポイントは共通であると考えられます。

一 【現代文】

【解答例】

- 問一 (1) 愚劣 (2) 自足 (3) 奇妙 (4) 後景 (5) 示唆

問二 体験は純粋な個人的領域にも成立するが、表現は共同性の場でのみ成立するという違い。(四十文字)

問三 沈黙自体一つの体験であり、個人的領域から共同の場へおもむくこととする力をもつから。(四十文字)

問四 沈黙の体験が言語で表現されると、表現主体の内面の言語化されない領域もさまざまに変化すること。(四十九文字)

問五 個人の体験の表現による共同化が、一つの体験として主体の内面を変化させ、あらたな表現を生み続けるから。(五十文字)

【配点予想】(二十点)

問一 各1点×5 解答通り

問二 6点 ポイント二ヶ所

- イ 体験は純粋に個人的なもの ……3点  
ロ 表現は共同性の場で成立 ……3点

問三 6点 ポイント二ヶ所

イ 沈黙自体が一つの体験

………3点

ロ (体験は) 個人的領域から共同の場におもむくこととする

………3点

問四 6点 ポイント二ヶ所

イ 沈黙という体験を言語で表現

………3点

ロ 表現主体の内面の沈黙の領域も変化する

………3点

問五 7点 ポイント三ヶ所

イ 個人の体験を表現して共同化する

………2点

ロ (イ) 自体が一つの体験として主体の内面を変化させる

………2点

ハ (イ・ロから) あらたな表現が生まれ続ける

………3点

ハのみでは不可。

【解説(総合)】

本年度の東北大学の第一問は、例年同様論説文からの出題であるが、今までよりも難化している。本文そのものの難易度もやや難しめだが、設問「こと」の字数制限がかなり厳しめ、ポイントを押えた上での高度な答案作成技術が要求される。

【解説(設問「こと」)】

問一 漢字設問。標準的なものである。

問二 「体験」と「表現」の質的なちがいを問う問題。直前部分の説明を要約すれば足りる。ただし、ここでの「体験」「表現」ということばが、これ以降の設問にかかわるキーワードになっている点注意を要する。

問三 「沈黙は表現への志向である」「こと」の理由を問う問題。一般的な注意として、単なるいいかえの答案にならないように気をつけよう。また、直接的な「理由」の説明がないため、やや説明しづらいが、本文の主題として「個人の体験と表現」というモチーフがあり、さらに、後半の傍線部近くで、「沈黙も体験である」「ことが反復されている。以上の内容をまとめればよいと考える。

問四 「ことばの秩序をうちあげる」「ことが、「沈黙の秩序」に、「あらたな秩序」を課すことについて、説明（いいかえ）を求められている。要は逐語的におきかえていけばいいのである。それぞれ「ことばの秩序」は「体験を言語で表現」すること、「沈黙の秩序」は「沈黙の（言語化されない）体験領域」、「あらたに秩序」は、「さまざまな変化が生じる」などの表現で言いかえることができる。以上の内容を過不足なくまとめる。

問五 「体験の秩序」と「表現の秩序」の関係を問う問題だが、設問に注意。他の設問部は（ア）（イ）（ウ）であるのに対し、ここのみは（A）であり、さらに設問の指定自体「本文全体の趣旨」を求めている。これは東北大の論説文の設問ではしばしば見られる形。基本的には、ここまでの三問の記述内容、設問部の表現を総合的にまとめることがポイント。それらを使って特に「表現行為自体があらたな体験となつて、主体の内面を次々変化させ、さらなる表現をつみだすようつなげてくる」ということ、すなわち、体験と表現はスタティク（静的）な関係でなくダイナミック（動的）な関係であることを説明できればよい。ただ字数内におさめるのはかなり難しく、部分点狙いでもやむをえないか。

## 二 現代文

### 【解答例】

問一 病で細くなったからだで、髪も治療のため剃っているが、生き生きした眼と意志的な口元をしているから。(四十八字)

問二 春の雑木林は草木も動物も生命力にあふれているが、小堀だけは死にかけていること。(三十九字)

問三 花をまとった山桜はぎつと、過ぎた春の日のように、その色を熱に変えて、か細く残された小堀のいのちに火をつけてくれるはずだ。

問四 死にのぞんで煩惱はないと思っていたのに、山桜に恋人の姿が重なって視えたから。(三十八字)

問五 死にのぞみ煩惱を捨てて作陶に打ちこもうとしたが、切るうとした山桜に恋人の姿が重なったことをきっかけに、以前切った藪椿の切り株の姿に自らの死が重なって視えたから。(八十字)

### 【配点予想】(二十点)

問一 6点 ポイント二ヶ所

イ 体が衰え、髪も剃っている ……3点

ロ 眼元・口元に力がある ……3点

問二 6点 ポイント二ヶ所

イ 春の雑木林の生命力 ……3点

ロ 小堀は死につつある ……3点

問三 4点 解答通り

問四 6点 ポイント二ヶ所

イ 死にのぞんで煩惱はなくしたはず …… 3点

ロ 山桜に恋人(みづき)の姿が重なって視えた …… 3点

イのみでは不可。

問五 8点 ポイント三ヶ所

イ 死にのぞんで煩惱を捨てる …… 2点

ロ 山桜に恋人の姿を重ねる …… 2点

ハ (ロをきっかけに) 藪椿の切り株に自らの死を重ねる …… 4点

【解説(総合)】

昨年の遠藤周作の『侍』に比べて、本文はやや読みにくい。設問も、問(五)の八十字以内の記述は、最近の東北大の問題の中では規模の大きさ、内容の複雑さの点で難問であると言えよう。答案の作成は、各設問の連鎖関係、つまり、問(一)から問(四)までで聞かれた内容が問(五)の伏線となっていることに気づくことができるかにかかっている。

【解説(設問ごと)】

問一 「解脱した」「+」僧侶」で、解答に必要なポイントが二つあることをつかむ。あとはそれぞれに対応する内容を傍線の箇所(ア)の前から探してつなげればよい。

問二 傍線の箇所(イ)において、「雑木林の生き物たち」と「小堀」が対比関係にあり、前者が生命力があふれているのに対して後者が死にかけていることをつかめばよい。また、「生き物たちが蘇ろうと」するのはこの小説のキーワードである。「山桜」の花が咲く「春」であるから、「春」という語は解答に必要なものである。

問三 傍線の箇所(ウ)の「その芯」が小堀の「いのちの芯」であること、それを「燃やしつくそう」とは、後に続く設問や本文末尾から明らかになようにかつての恋人「星野みずき」との思い出を消し去ろうとという意味であること、星野みずきが「山桜」に重なることから、答えの箇所が導き出せる。

問四 傍線の箇所(エ)の直前に、「今となっては、山桜の姿が再び煩惱に化身することもあるまい」とある。「煩惱」は本文のキーワード。そのすぐ前に「星野みずきと山桜の姿が重なって視えていたのである」「星野みずき」「山桜」とあるから、「小堀」は死にのぞんで、「星野みずき」に關しての煩惱はないと思っていたということになる。「それなのに……鮮やかな輪郭を伴つ空白」「星野みずき」を視てしまった」とあるから、その間にある落差の大きさのせいで「軽いめまいと動悸を感じた」と理解できる。

問五 まず、傍線の箇所(オ)の直接の理由としては、傍線の真上にある内容「以前切った藪椿の切り株の姿に自らの死が重なって視えたから」である。これを答えの最後に持つてくるべき。そして答えの前半に設問連鎖に留意しつつ小堀の心情の変化を組み込む。具体的に指摘すると、「死にのぞみ」問(一)(二)(四)(煩惱を捨てて作陶に打ちこもつとしたが)問(三)(四)、切るつとした山桜に恋人の姿が重なったことをきっかけに)問(四)問(一)問(二)問(三)問(四)が、というように、各設問は段階を踏んだ連鎖関係にある。このような設問形態は、東北大に典型的なものである。

### 三 国文

#### 【解答例】

問一 (1) 強いて (2) たいそうおそれ多いことには (3) 心苦しく思っております

問二 ふだん聞き慣れていらつしやる都の中には、めったに例がないだろうとはつと気づかされるのは、琴の音がこの上なく素晴らしいのだろうか。

問三 琴を弾く女性に強く心をひかれ姿をはつきり見たいのに、簾が下ろされてしまったため。(四十字)

問四 二人の将来が不確かなので、あなたを恋人にするつもりはない。(二十九字)

問五 尼上との会話を通して、宰相の君の素姓を知りたかったから。(二十八字)

#### 【予想配点】(二十点)

問一 各1点

問二 5点

- ・「琴の音が素晴らしい」……………2点
- ・「なべて聞きならし給ふ」……………1点
- ・「をさをと類あるまじつ」……………1点
- ・「驚かるる」……………1点

問三 4点

・「簾を下ろされ(て)女性が見えなくなつた」……………2点 必須要素。これが出ていなければ不正解とする。

・「女性をはつきり見たい」

……………2点

問四 4点

・あなたを恋人にするつもりはない ……2点 必須要素。これが出ていなければ不正解とする。

・二人の将来が不確かなので ……2点

問五 4点

・宰相の君の素姓を知りたい ……2点 必須要素。これが出ていなければ不正解とする。

・尼上との会話を通して ……2点

【解説】

問一 いずれも基本語句だが、(3)は文脈上丁寧語を補つのが望ましい。

問二 重要語句の訳をはずさないこと。「こよなきならん」の前に、「琴の音」を補つことが必要。

問三 傍線部を「言いよつもなく残念」と捉えられれば、そついつ心情が出てくる理由として、直前の「簾うち下るす」に目をつけられるだろう。さらに、この段落の一行目には「琴弾く人は柱隠れにて、まほにも見えず」とあるのもポイント。「よく見えないので、はつきり見たい」という状況に気づくこと。

問四 「いかでかは…馴れん」は反語表現。「武蔵野の…」以下と倒置されており、「いかでかは…馴れん」のほつが主題。設問は和歌の意図を聞いているから、訳よりもむしろ主題をはつきり書くこと。

問五 全体の文脈や、和歌の内容から、中將が宰相の君に関心を持っていることは明らかである。そして、傍線部付近での尼上との会話を通して、尼上と同居している宰相の君についての情報が得られることを期待していると考えられる。



## 四 漢文

### 【解答例】

問一 (1) けんしゅんをしていていちょうたらしむ。

(2) しゅんみずからしよせいをほつむりし／ほつむりたる／ほつむるの(ことあるをおもつ)。

問二 (ア) かつて (イ) にわかに (ウ) さきに

問三 わたしは洛陽に来て病気にかかり、余命はいくらもないにちがない。

問四 盗まれたはずの馬が、王屯を乗せて戻って来たから。(二十四字)

問五 書生を葬る時、残った金を使わずに棺に入れた屯の徳を、天が顕彰したと知れたから。(三十九字)

### 【配点予想】(二十点)

問一

(1) 3点 ポイント二ヶ所

イ 使役構文 ……2点

ロ 他 ……1点

□ のみでは不可。

(2) 3点 ポイント二ヶ所

イ 全体の構文「しゅんみずからしよせいをほつむりし」 ……2点

ロ 「葬書生」が、「事」を修飾している。しよせいをほつむりし(りたる／るの(こと) ……1点

問二 (ア) (イ) (ウ) 各1点 解答通り

問三 3点 ポイント二ヶ所

- イ 再読文字「当」+ 述語「在」の関係と訳 ……2点
- ロ 「而」前後の並列関係 ……1点
- ロ のみでは不可。

問四 3点 ポイント二ヶ所

- イ 馬が盗まれた(いなくなつた) ……1点
- ロ 人を乗せて戻つて来た ……2点

問五 5点 ポイント三ヶ所

- イ 王屯が書生を葬つた ……1点
- ロ 金に手をつけなかつた ……2点
- ハ 天が(イ・ロの)徳を顕彰したことがわかつた ……2点

【解説(総合)】

近年、東北大学の漢文は議論の文が中心であり、説話的文章からの出題は99年度以来である。ただし、例年通り基本的な構文知識、副詞の読み、さらに全体の内容の読解と、総合的な内容がバランスよく出題された良問と言える。

【解説(設問ごと)】

問一 基本的な構文知識を問う問題。

- (1) 使役構文の読み。基本的なものであるが、東北大での出題は多い。
- (2) 「屯自念有葬書生事」そのものは特殊な構文ではないがいわゆる「複文」になっている。「有葬書生事」は「自念」の目的節。

問一 副詞の読みを問う問題。例年出題されている。

問二 まず、再読文字「当(まさに)べし」がどこにかかるかがポイント。直後の「到洛陽而被病」にかけようとする、この部分の意味がとれなくなる。実は「我当命在須臾」という形の中に、先の副詞句がはさまっている形。「須臾」は「ほんのわずかの時間」の意味。副詞句の部分は「而(= and)の前後が並列になる。

問四 設問部は「主人は見て喜んで『どろぼつをつかまえた』『盗まれたものをとりかえした』?』といった」という意味。これを訳せば、直前部分で答えればよいことがわかる。

問五 本文全体の内容を整理する問題。傍線部(a)から(1)にかけてのところで、書生を葬る時に、書生の金十斤の内、一斤だけ使ったとある。さらに、傍線(c)直前から、残りの金が、棺の中にあつたことがわかる。さらに、「この傍線(2)から、以上の行為が「陰徳」(かくれたりつばなおこない)であること、「天がそれをあきらかにしようとした」ことがわかる。以上の内容を総合してまとめる。

#### 現代語訳

王屯が以前、みやこ洛陽に赴いた時、空き屋の中で一人の書生が病気で苦しんでいるのを見た。気の毒に思つて世話をすると、書生は屯に、「私は洛陽に来て病気にかかり、余命はいくらもないにちがいない。私の腰の下に金十斤があるが、どうかこれをあなたに贈つて、死後に葬ってもらいたい」と言った。まだ姓名も問わないうちに、命が絶えた。屯は金一斤を売り、葬儀を行った。残りの金はすべて棺の下に置き、それを知る者はいなかった。数年して、県は屯を宿場の長にした。はじめて任地にいった日に、馬が宿場に走りこんで、そこにどどまった。(さらに)突然強風が吹いて、上等の掛け布団を飛ばして屯の前に落とす。すぐにこれを県に報告すると県はこれらを屯のものとした。後にその馬に乗つて洛陽にゆくと、馬が急に走つて屯を引いて、他人の家に入つていった。(家の)主人はそれを見て、喜んで、「今馬どろぼつをつかまえた」と言った。屯にどうやって馬を得たかを問うた。屯はくわしく状況を説明し、いっしょに掛け布団のことも説明した。主人は「以前、家の布団が強風によつて馬といっしょに見えなくなった。あなたはどんな陰徳があつて、この二つを手に入れたのか」と言った。屯は自分で、書生を葬つた事があつたのを思い出した。そこでそのことを説明し、さらに書生の容姿や金を埋めた場所のことも言った。主人は驚いて叫び、「それは私の息子です。姓は金、名は彦です。以前みやこに行き、どこにいるかわからないのです。まさかあなたが息子を葬つていたなんて思いませんでした。こんな大恩にまだ報いていなかったから、まさしく天があなたの徳をあらわしたのです」と言った。そこで、屯といっしょに彦の棺を迎えたところ、彼の金の残りがいっしょに入っていた。屯はこのことで名をあらわした。